

# 「奥さんこりや火じやいぎ いません色でいぎおます」

夏目漱石の一番弟子  
作家・森田草平さんの思い出

## 小塩 立吉

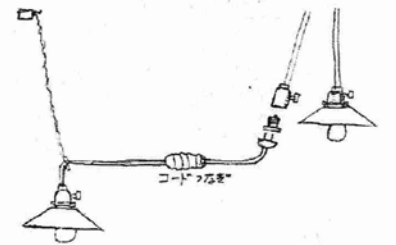
山都飯田には戦火を避けて沢山の文士が疎開しておられた。幸い父(小塩禄郎)は味噌醤油醸造業(松岡屋13代目)をしており、地元の日夏歌又介さんなど色々な方々と交流があった。正直なところ戦中物資は払底して、文士の方々も慣れぬ土地で生活に困っておられた。

疎開文士にはフランズ文学の岸田国士「煤煙」細川ガラシヤ夫人「などを書かれた森田草平さんなどがおられた。森田さんは山本



森田草平 「郷土の百年」第号 南信州新聞社

いるのを目の当たりにしたようであった。どうも「息子に電気が好きなのがいるので、何とかなるかも知れません」とても、いい顔してきたのである。私が多分小学校3年(1944)昭和19年)の時であった。家に帰るや「森田草平さんの電灯を何とか延ばしたいんだが…」と言われた。そう言われても当時はみんな店仕舞いで電気コードなど売っていないから、家にあつた古い電灯コ



ドを持って自転車の後ろに乗せられ二里ほどの道を山本村の惣教寺を目指した。境内に着くとしだれ桜がある。こぢんまりした境内は晴時雨だった。踏み台などを運んで、机の上

ードやソケットなど掻き集めた。絶縁テープもなく布を何重にも巻いて絶縁し子供細工で継ぎ合わせ、何とか一本の延長コードをまとめた。父に見せ、家の電灯から延長した先に電球が灯るのを確認した。(中古のコードを素人が途中で繋ぐなどは、今の常識からすれば危険極まりないこと。)

さあ数日後、コー

その頃、味噌醤油は

南信州 紙が私のホームページを元に学芸欄に載せてくれました。

2015年11月26日付です。 遠い日戦時中小三の頃の思い出です。

http://www7b.biglobe.ne.jp/~tkoshio/ もどうぞ。 小塩 立吉

紹介の労を執っていただいた前沢義行さんに御礼申し上げます。

統制物資で月一回の配給だった。他の副食も欠乏し味噌醤油は生活の綱だった。森田さんも何度が家を訪ねてこられ、その度に味噌醤油をせがまれた。父は「配給する物資を横流して売ることはいけません。今度だけです」と帰り際に黙って差し上げていた。しかし、またお見えになった。難破船の救命ボートに乗っているようなものだ。もはや15人満員で、これ以上乗ったら皆助からない。そう言う場合16人目の人は涙を飲んでお断りする以外にない」と切々と訴えた。この話の趣は、森田草平選集 第5巻(理論社1956年)に先生の筆で書き残されている。

終戦後の第一回の衆議院選挙の時、完次叔父が立候補し、味噌醤油の諷で、森田さんに応援演説をお願いすることになった。そのため、め足繁くお見えになるようになり、その度、家の中央の座敷で刻み煙草を吸っておられた。煙草盆の火鉢に炭火を準備するのは私のお手伝いだった。家中煙草臭くなるし子供心に嫌だった。茶目だった私は、煙草盆の火鉢の炭の先に朱墨を塗り、程よく灰をまぶして置いた。

その頃小塩完次の選挙のため、とよ子叔母が飯田に見えていた。やがてお見えになった森田さんは、いつものようにキセルを刻み煙草を込め何度か吸ってはみたが、どうにも火が付かない。「奥さん、

「こりや火じやいぎいません色でいぎおます」と訴えた。居合わせた、とよ子叔母は事前にも知らず「あら前にも何も知らず」あらあった。だが、酷く叱られることもなかった。元より完次夫妻は禁酒禁煙主義者だった。後々武蔵野の完次宅を訪れる度にとよ子叔母から私への語り草になっていた。

(2014・11・11)

参照「郷土の百年」〈第一号〉飯田文化財の会編 南信州新聞社 昭和44年発行

＊(1)お たつきち 1936(昭和11)年生まれ。飯田市伝馬町出身。東京都日野市在住。